

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1293 号	氏 名	渡 邊 達 夫
論文審査担当者	主 査 小泉 知展 副 査 関島 良樹 ・ 工 穰		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>我々は小児がん経験者の長期生命予後改善を目的として、がん素因遺伝子の生殖細胞系列の病的バリエントを検出し、独自の二次がんサーベイランスを行うシステムを構築した。</p> <p>当院に通院している小児がん経験者を対象とし、独自に開発した 165 のがん素因遺伝子パネルを用いて次世代シーケンサーなどで解析した。</p> <p>病的バリエントが見付かった場合の二次がんサーベイランス方法は、米国小児がん研究グループの長期フォローアップガイドラインをベースとして、各種文献などを参考に構築した。</p> <p>また、このシステムが小児がん経験者に与える心理的影響を評価するため、検査の前後でアンケート調査を実施した。</p> <p>その結果、渡邊らは次の結論を得た。</p> <p>(1)16名の小児がん経験者が本システムに参加した。年齢は15歳から42歳で、中央値は22歳であった。一次がんの種類は白血病が13名と多数を占めていた。本システム受診時点で4名が既に二次がんを発症していて、うち1名は一次がんを除いて3度のがんに罹患していた。</p> <p>(2)がん素因遺伝子の病的バリエントは一例も検出されていない。VUS (Variant of uncertain significance) は10名に検出された。</p> <p>(3)VUS の場合は原則として二次がんサーベイランスは強化しない方針としているが、1名のみサーベイランスの強化を提案し、同意を得た。その理由として、病的意義についての評価が分かれていること、化学療法や全身放射線照射を受けていることなどがあった。</p> <p>(4)アンケート調査結果は、全体的に検査前後で大きな変化はみられなかったが、VUS が見付かった10名のうち4名が検査後に不安が増大したと回答し、VUS が見付からなかった6名中4名は検査後に不安が減少したと回答した。</p> <p>上記のように、現段階では病的バリエントは検出されておらず、二次がんサーベイランスの有効性は評価できていない。</p> <p>今後、より多岐にわたる一次がんの経験者を対象に検査を行っていくことが、二次がんの早期発見のみならず本システムの評価のためにも重要であると考えられる。</p> <p>本システムはまだスタートしたばかりであるが、報告されている限りでは世界に先駆けて行われている小児がん経験者の二次がんサーベイランス方法であり、非常に意義のあるものと思われることから、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			